

安心して住み続けられる舞鶴を



憲法9条を生かした
平和外交で

舞鶴を平和の港に！
自衛隊員の命を全力で守ります

9条改憲・軍事費2倍・敵基地攻撃……「戦争する国」づくりストップ！

ロシアによるウクライナ侵略に乗じ、舞鶴の“軍事拠点化”を求める声があがっています。

こんなことは、障害者福祉にたずさわった者として、絶対に認めるわけにはいきません。障害を持っている方々が、戦前戦中にどんな扱いを受けたのでしょうか。「穀潰し」とか「非国民」と言われ、真っ先に差別され、冷遇されました。

日本共産党は、岸田政権の「戦争する国」づくりをやめさせるために全力をあげます。

そして、コロナ禍と物価高騰から市民のいのち・くらしを守る「大軍拡より暮らし応援」の政治へ転換するため頑張ります。

舞鶴民報

2022年11月3日号 発行：日本共産党舞鶴地区委員会 電話：0773-65-4050
日本共産党舞鶴地区委員会が、上記の政策と見解を発表しましたので紹介します。



市会議員

小杉えつ子

人の痛みわがことに
5期20年医療・福祉・防災に全力

コロナ・物価高での暮らしの悲鳴・願いをみなさんからたくさんお聞きし、ひたむきに議会に届け続けてきました。とりわけ、影響を強く受けている障害者の方々に心寄せ、日常の暮らしが壊されないよう、支援策の強化を求めてきました。

市長が前のめりで進めていたパーム油による火力発電所の建設計画を断念に追い込むことができました。学び、運動し、住民の声が市政を動かす貴重な体験でした。

私の原点は、障害者があたり前に働き、暮らしを地域で築ける社会を目指すことです。それは誰もが生き生きと暮らすことができる社会に繋がります。これまでも増して「平和と暮らしを守る」市政をつくるため力を尽くしていきます。

舞鶴市会議員 小杉 えつ子

日本共産党

【プロフィール】66歳。舞鶴で生まれ育ち、夫と長女の3人暮らし。京都文教（旧家政）短期大学を卒業後、まいづる共同作業所に勤務（現・まいづる作業所）。現在、まいづる共同作業所・まいづる作業所友の会幹事、舞鶴健康友の会世話人。党議員団幹事長。



なんとかしなきゃ

福祉

医療

防災

農業

市民の痛みに心よせ 市政を動かした

5期20年
小杉えつ子物語



短大を卒業し、まいづる共同作業所（現・まいづる作業所）の誕生とともに職員として働き始めた小杉さん。23年間、障害を持つ仲間とともに働くなか、「誰もが生きていて良かったと思える社会をつくりたい」と市会議員の道を決意しました。

これを原点に5期20年、どんなに困難な問題も「なんとかしなきゃ」と市民に寄り添い、粘り強くとりくんで数かず実現。市政を動かしてきました。長引くコロナ禍、深刻な物価高騰、頻発する災害——など問題山積のいま、いっそうの期待が寄せられています。

「障害が重くても働きたい、 地域で暮らしたい」の願いを議会へ

「障害が重く自力では座れない方も、希望すれば作業所に通い、社会に参加できるようにできないか」——障害のある方たちの働く場、暮らしを築くための制度や施設の遅れを改善しようと、市議会でも何度も質問。利用者が医療的ケアを受けられるように看護師を配置するための補助金を実現しました。

その結果、障害者のグループホームは、20年間で10カ所に増えています。重度の方が利用できる施設もできました。

小杉さんが、障害者のグループホームづくりに関わるようになったのは、知的障害を持つ利用者が火事で亡くなったこと。家族と母屋で過ごすことが困難で、仕方なく“はなれ”で寝起きしていたため、逃げ遅れたのです。

「制度がなければ、みんなでつくる」——この小杉さんのスタンスは、たくさん出会った悲しく悔しい出来事から生まれたものです。



みなさんの声を力に 市政が動きました



- ◆公害振りまく「パーム油発電所」を断念においこむ
- ◆コロナ対策の拡充——発熱外来の充実（加佐診療所など19カ所）
無料のPCR検査・抗原検査の実施（7カ所）
- ◆中学校すべての美術教室にエアコン設置
- ◆公立保育園で完全給食の実施 など

赤ちゃんの感染死を繰り返すな！ コロナ感染の母子が一緒に入院可能に

生後10ヶ月の赤ちゃんがコロナ感染判明後、入院できずに亡くなったとの報道当日、ただちに議会で質問（3月）。その後も議会質問や要望書を提出し、体制強化を求めました。ともに感染した母子が一緒に入院できる体制がつけられました。



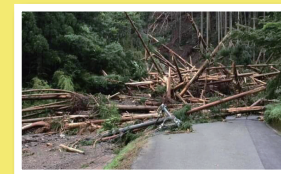
西舞鶴に人工透析センター開設 患者の手紙うけた初質問が実る

「東舞鶴までの通院でさらに体に負担がかかる」——治療の辛さをつづった透析患者からの手紙をきっかけに、20年前の初議会で初質問。当初、市は「設置は困難」と拒否。日本共産党以外の議員も、市民の請願に反対。それでも粘り強く要求しつづけました。

その結果、市も必要性を認めバックアップ。2020年4月に開設され、課題だった患者の送迎も実現。

「たとえ1人の声であっても、正当な要求は必ず実現する」との、小杉さんの信条が貫かれています。

すぐに現場へ 復旧・被災者支援に全力



2018年7月の豪雨で、大呂地区が完全孤立状態に。小杉さんは、自動車通行止めの道をバイクに乗っていち早く現地に駆けつけ、現場の状況を市に伝え、早期復旧を求めました。（左上写真）

真っ先に駆けつけて小杉さんがSNS発信する被害情報は、市職員の目にとまり評価されるように。市議が収集した被害実態を「市災害対策本部」に届け、役立てる仕組みがつけられました（2016年策定『舞鶴市議会における災害対応』）。

いまでは全国の地方議会に広がっています。



災害から市民を守る先頭に 抜本的な対策求め、繰り返し提言

国会議員とともに現場を調査（右上写真）。小杉さんは、18年前から「輪中堤にポンプ場の配備を」「道路のかさ上げを」「防災無線を全戸に設置を」などの声を議会に届けてきました。

F Mまいづるによる防災ラジオ放送のための中継局増設、防災ラジオの無償貸与（大浦地域）まで進みました。

有害鳥獣駆除の体制が強化 被害から農家を守る

加佐猟友会からあがっていた要望を議会に取り上げ、▶約20年前のままだった「捕獲班」人数の拡大▶ライフル使用の許可——などが実現しました。



市政情報を
連日発信！



@kosugi_etsuko



@JCPMaiduru